



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024

東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03) 3418-4933

第5号 1999年9月発行

編集/発行: 広報部

青年の向かふところ



牧師 陣内厚生

大学は「不登校」の学生をどう立ち直らせたらいいか——という新聞記事に目がとまりました。ついに大学までが、居場所を見つけれず、また対人関係になじめない学生たちのために、文部省の肝煎りで研究会を発足させたというのです。深い人間関係をきらう若者が増え、自らの人格形成の大事な時期をみすみす損っていく状況を見るにつけ、暗澹たる思いに陥ってしまいます。

実は、私は八月の声を聞き、書棚から「戦争のなかの青年」(大島孝一著、岩波ジュニア新書)をとり出し、読み返したばかりでした。年々行事のように、この種の本に手が出してしまうのですが、事実として遺された戦時下の青年たちの証言は、読むたびに私の胸に重い問題を突きつけてくるのです。平和の問題を考えるにしても、人間の問題を考えるにしても、戦争という強いられた状況は、深層の青年像そのものを表すのに十分なものがあると言えるでしょう。そこには軍国主義の教育で培われた愛国心、死生観、長幼の序、そして苦悩が綴られています。

死を覚悟して戦艦武蔵の乗組員となった兵長の遺書を一例としてあげると、「お父さんお母さん、とうとうお別れするときに参りました。僕はこのから〇〇方面の戦場へ向かいます。(中略)この上は粉骨砕身、天皇陛下の御為に立派な働きをするつもりでおります。(略)この世に生をうけて十九年、思えば短い一生でしたが、いまさら何も思い残す事はありません。僕が死ぬことによつて、日本に本当の平和が訪れて、みんなが倅せに暮らせるようになるなら、僕はそれで本望です。(略)これから体につけて、いつまでも達者で、僕の分まで長生きして下さい。(後略)」と。このような遺書がなんと多いことでしょう。

しかし、一方で戦争の不条理、非道、無責任を見抜き、懐疑を覚えた出陣学徒もいます。その手記の一つに、「私は限りなく祖国を愛する。けれど、愛する祖国を私は持たない。深淵をのぞいた魂にとつては……。」とあります。これに代表されるように、国家と自己の関係や己が魂の所在を真剣に考えた青年たちも少なく

ありません。戦陣に散ったこれら青年たちが、いづれも自らの存在価値を問いつけていたことは確かです。

さて、時代は変わり、経済優先の社会となった現在、青年たちは何を考えているのでしょうか。三無主義とか五無主義とか言われながら、青年たちは生き生きとした未来への方途も展望ももっていないのが現状ではないでしょうか。ましてや自らの存在価値をぶつけるものを見出していないとしか思えないのです。物質的豊かさは、青年の向上心を失わせ、生活の緊張感を弛緩させるなど、現状肯定的・非理想主義的態度に陥らせてしまいました。

聖書は、「若者は幻を見る」(使徒言行録二の一七)と語っています。青年たちには、現状に甘んじるのではなく、本来の特質と未来志向のまなざしを持っていてほしいのです。時代をさめた目で、自己を再発見し、その存在を賭ける所を確保してほしいのです。それに応えてくれるのは、自らの存在を打ち開き、あらゆる重荷も苦悩も受け止めて下さったイエス・キリストその方です。